

# トピックス

## いわき産米の安全・安心の検査米確認



平成24年産米の全量全袋検査が市内9ヶ所において9月後半から行われました。

原発による放射性物質の検査には、目に見えないだけにとまどいを感じましたが、毎日食するものなので安全・安心のためには、農家と消費者双方に必要なことだったと思います。

農家にとっては、手間のかかる仕事でしたが、検査結果は99.9%以上が50ベクレル以下で、100ベクレル超が1袋出ましたが、ほとんどが検出下限値未満でした。

しかし、浜通り産米は、原発事故以前の米単価には戻っていませんので、風評はあるのだと感じざるをえません。

本年も安全・安心のために、全量全袋検査が行われますので、少しでも数値が下がるように農家の皆様も努力をしながら、もうすぐ来る田植えに向かって頑張ってくださいませ。

## 農家のための情報誌

全国農業新聞の購読をあなたも

発行・・・毎週金曜日(月4回)  
購読料・・・月600円  
申込先・・・お近くの農業委員  
または農業委員会事務局  
電話・・・(22) 7534

### 編集委員

荒川 光弘 草野 城太郎  
飯高 敬一 渡邊 和夫 佐川 良平



# 畑に回廊美術館も！

## いわき万本桜プロジェクトと地元の協力者・木村さん

平神谷地区にある山林を日本一の桜の山にしようという活動している「いわき万本桜プロジェクト」をご存知でしょうか？

震災の記憶を後世に語り継いでほしい、原発事故でマイナスのイメージになってしまったふるさとを再生させようと、地元有志が2011年5月に立ち上げました。

以来、月1回のペースで行われる植樹会には日本全国、そして海外からも申し込みがあり、多くのボランティアに支えられながら活動を続けています。プロジェクトが始まったとき、最初の課題となったのが、植える場所の問題でした。しかし、プロジェクトのことが人づてに伝わっていくにつれ、近隣の山林所有者が一人、また一人と土地の貸し出しを申し出てくれるようになりました。



▲木村さん親子

同地区で代々農業を営んでいた兼業農家・木村光一郎さんとその一人、木村さんは原発事故後、家族とともに静岡県に避難しました。福島原発から約35キロの距離にある木村さん宅の周辺では、放射線量が高い所も点在していたため、子供への影響を考え、妻子はそのまま静岡に残し、光一郎さんは母と一緒に戻って、仕事と農業を再開させました。収穫された米の放射性物質は、

検出下限値未満で無事出荷されましたが、震災前の暮らしが取り戻せたわけではありません。春の山菜採り、小川での水遊び、季節ごとの野菜の収穫・自然豊かな環境で当たり前に享受していた四季折々の楽しみは失われたままです。「季節を感じ、味わう」ということは農家にとっても楽しみであり、生きがいでもあった。子供の情操教育の場でもあったはず。山菜もキノコもスーパードに行けばいくらでも安く売っているのだから、収穫の喜びは簡単にお金に換算できない。」と話します。これから長く放射能と向き合っていくためには、震災の記憶を語り継いでいくといういわき万本桜プロジェクトの趣旨に賛同し、協力を決めました。放射線物質が吸着してしまつた山林に対して将来の行く末を危惧していたという内情もあり



▲木村さんの山林で建設が進むいわき回廊美術館

ます。しかし、プロジェクトが動き出した今は、夢を描く楽しみもできました。木村さんが貸し出した山林の一部には、今年4月までにプロジェクトを支援している現代美術家・蔡國強さんが企画する「いわき回廊美術館」という半屋外の展示スペースも完成する予定です。「いわき万本桜プロジェクトは、いわきの人々の散り散りになつてしまつた心を集め、支えになつていくのでは。完成したときには、碑文を建てたりしたいですね。」そう微笑む木村さん。3月には、2年ぶりに故郷に妻子を迎え、家族そろつての生活を再開させます。

## 編集後記

今回の地区だよりで紹介したいわき万本桜プロジェクトの山に今春、全長99メートルの「いわき回廊美術館」がオープンします。

美術館を企画した蔡國強さん(ニューヨーク在住)は、中国出身の現代美術家。

北京オリンピックの開会式で花火によるパフォーマンスを披露したのが有名で、昨年11月には高松宮殿下記念世界文化賞を中国人で初めて受賞しました。蔡さんは、まだ売れてない青年画家だったところに、いわきに滞在したことがあり、市民との交流は20年になります。

いわきの廃船をモチーフにした「いわきからの贈り物」は、ファンの間でも人気の高い作品の一つで、海外で展示があるたびに、いわきから友人たちが組み立てを手伝いに行っているのです。

いわき回廊美術館には4月から、市民と蔡さんとの交流の軌跡を記録した写真展などを開催する予定です。山の花も見ごろになったころ、ぜひ足を運んでみてはいかがでしょうか。

(執筆 渡邊 和夫委員)